



教員志願者減少に思う

富山国際大学 子ども育成学部
教授 水上 義行

小学校教員養成にかかわって、8年目を迎えようとしている。38年間叩き上げてきた教師職を基盤に、学生たちと丁々発止でやり合いながら、教師の魅力を追いかけてきた。先日、4期生と最後のゼミ合宿に福井県の史跡巡見を行い、歴史を学ぶことが、人間教育の要の一つとなることを確認した。また、酒を酌み交わし、宴会の仕方や場の持ち方、思い出の作り方などを通して、組織の一員としての連帯感を深めるための最後の指導の機会とした。

私の研究室からは、短い者で1年、長い者で3年のゼミ生活を送り、20名が教諭として富山県・新潟県に奉職し、2名が一般公務員、1名が大学院で特別支援の研究、6名が臨任講師として学校現場に立つ。日頃から、学生たちには、互いに学び合い、高め合うためのコミュニティの構築が、信頼される教師への近道であり、上司や先輩、同僚と語り合い、認められることが重要だと説いてきた。

しかしながら、若い教師たちは、学校における居心地が必ずしも良いとは言えない状況にあるという。教師同士の語り合う場が少ない、価値観が多様化しすぎてまとまらない、研修旅行さえも実施されないなどと言った声が聞こえてくる。かけ声だけのチーム学校は、教師を目指す学生の減少に歯止めをかけない。

新聞報道によると、「公立小教員試験低調3.4倍」（2015,11,25読売）と、朝刊の一面を飾る。我が富山県においても、最近では3倍前後を推移する。教師は「全体の奉仕者」であり「聖職」とまで言われた誇りはどこへ行っ

たのであろうか。先輩たちが築いてきた伝統の灯を消してはいけないのである。

3倍前後の志願者は、資質の高い教員確保を図る上での危険水域である。このことを教員養成に当たる大学と学校現場は課題として受け止め、共有しなければならない。

なぜ、志願者が少ないのか、それは、「教師という職業・学校という職場に魅力がなくなった」からである。様々な課題を撥ね退ける、教育への情熱が消えかかっていると指摘したい。本学の学生が、教育実習やインターンシップのために、母校を訪ねると、受け入れてもらえないという信じられない現実がある。故郷を追われる学生は、どこへ行けばいいのか。教育とは何かを、原点に立ち止まって考えなければならない。

もう一つ上げるならば、「教師に時間と心のゆとりがない」ということである。終・修業式が終わるのを待ち兼ねて、「白馬」や「赤倉」に走ることでできる職場の復活を願いたい。パソコンの画面に向かい、時間を忘れ、黙してキーを打ち続ける職業から新しい時代を担う教師の育成は難しいと言わざるを得ない。

平成27年12月21日、中央教育審議会は、「教員の資質向上は、我が国の最重要課題である」ことを答申している。今こそ「温故知新」である。教員養成にかかわる全ての関係者は、このことを重く受け止めなければならない。